

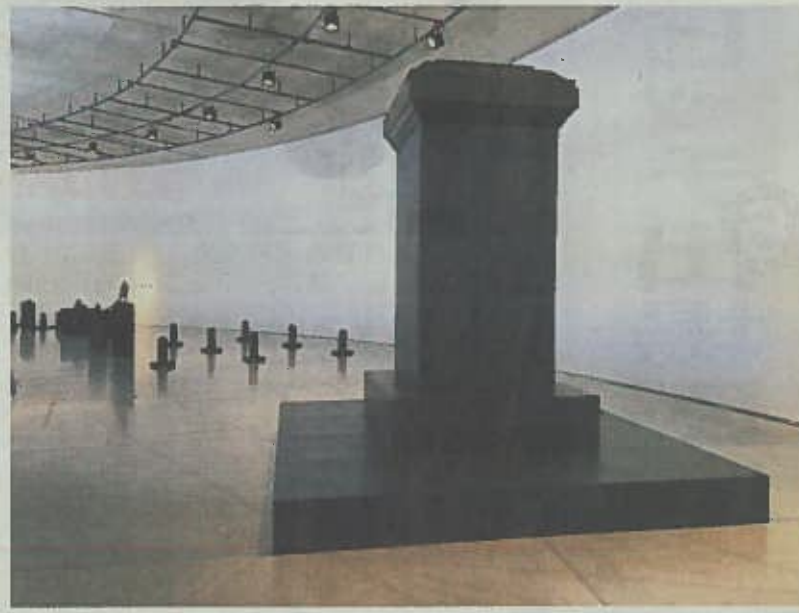
# 彫刻から社会を考える展覧会

## アートの現場から

### ACCAC通信

青森公立大学国際芸術センター青森（ACCAC）では、2021年12月25日から二つの展覧会が始まりました。ギャラリーAでは、県内にある野外彫刻の歴史や背景を探り、現代美術のアーティストと共に新しい見方を試みる「表層／地層としての野外彫刻プロジェクト2021」ここにたつ」の一環として、彫刻家であり研究者、批評家でもある小田原のどかさんによる個展「近代を彫刻／超克するー雪国青森編」を、ギャラリーBでは、青森で活動するアーティストの作品を紹介する「ヴィジョン・オブ・アオモリ」の特別編として、2021年末に生誕140周年を迎えた大光寺（現・平川市）の大川亮さんが収集したオリゲラやコギンと、そこから生み出された農閑工芸品による展覧会「大川亮コレクションー生命を打込む表現」を開催しています。

今回は、小田原のどかさんの個展について紹介します。小田原のどか作《雪中行軍遭難記念像》の台座



す。小田原さんは、2021年10月に『近代を彫刻／超克する』と題した単著を出版されました。同書では近代化によって西洋から日本へもたらされた「彫刻」という概念が、その時々々の社会を反映しながら、現在も街角にある彫像や記念碑へいかに表現されてきたか考察されています。野外彫刻はいわば歴史の定点装置であり、それらを見る私たちや社会こそが変化していること、そして彫刻を問うことは、近現代史やジェンダーの問題、公共とは何かを問うことなのではないかと小田原さんは世に投げかけています。

青森の野外彫刻を調査するにあたり、小田原さんが特に着目したのは八甲田山にある大熊氏広《雪中行軍遭難記念像》と和田湖畔の高村光太郎《乙女の像》です。この二つの像は、まるで八甲田連峰を挟む形で存在し、造形的に見ても日本の彫刻史にとって重要な対比となっています。工部美術学校に学んだ大熊は油粘土での造形を行いました

が、東京美術学校に学んだ高村はロダンの影響を受けながら、乾くとかなり硬く固まる水粘土を用いました。単に西洋彫刻の技法を取り入れるといっても、そこには素材がもたらす表現や西洋化をいかに捉えたかによる差異が発生しています。

高村光太郎《乙女の像試作第一号小型群像》や今克己《八甲田山模型》（以上、県立郷土館蔵）や田村進制作の大熊氏広《雪中行軍遭難記念像》（銅像茶屋蔵）をはじめとする貴重な実資料も展示しています。雪中行軍遭難事件から2022年1月でちょうど120年。なにかを記念するということとはどういうことなのか、本展を通して考えてみませんか。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 慶野結香）

※小田原さんの個展と「大川亮コレクション」展はともに2月13日まで